

人がよりよく生きるための社会科学習を求めて

～自ら学習をつむぐ子を育てる～

松尾 光孝

社会科の学習は、人がよりよく生きるためのものだ。今回、その意味するところをさらに深めるために実践を続けた。社会科学習が子どもの生活の中から始まる。子どもの生活の中から始まった学習をどうみとるかによってその後の学習の展開には様々な方向へと進む可能性があることが分かった。しかし、社会科の単元の目標を考えれば安易に進んでいいわけではない。しっかりと単元の目標を意識しつつ一人ひとりの学習をつむいで目標へと向かっていく必要がある。このことは教師の側は当然意識してやらねばならないことであるが、子ども自身も意識する必要がある。「ひと・もの・こと」と出合っただけで疑問が生じ、ひとり学習が始まるが自分だけの学習の中だけでは自己発生の自己完結に終わってしまう。他と交わっていないため学習そのものは薄いものとなる。そこに他者との関わりがあると、自分だけでない、他の子とともに創った学習課題が生まれる。学習課題に向かうとき、子どもたち一人ひとりに吟味する必要性が生まれ、よりよい学習へと向かうと考えた。

今回、水産業の学習と情報産業の学習では、「つむぐ」ことを意識して学習に取り組むことの大切さを知ることができた。一人ひとりが同じ土俵に立った上で一つのことに向かおうとする姿の中には予想もしない展開を巻き起こすこともあった。

ただ、本時の学習で「つむぐ」ことができたか？と問われれば疑問も残る。学習の展開と本時での「つむぎ」を指導者としてどう考えるのか…特に本時の「つむぎ」が難しいことを痛感した。

キーワード：発展・提案型の社会科学習 つむぐ・つむぎ 単元計画のつながり

1. 人がよりよく生きるための社会科学習とは？

～自分らしい社会科学習の構築～

社会科の学習を行うにあたって、社会科を研究してこられた先輩方からお聞きした「社会科の学習は、結局人が人らしく、よりよく生きるためのものだ」と言われた言葉が印象的に頭の中にはある。一年目の実践でなんとなくだが、その外枠が見え始めた。

二年目に入って社会科という輪郭をはっきりさせることが目標だったが、

- ①社会科が子どもの生活から始まること。
- ②子どもたちがひとり学習をするにあたって魅力的で？を多くもつことのできる教材であること。
- ③学習課題をつくるにあたって、子どもから出てくるのが望ましいが、単元の目標へ向かうことを頭においてつくる必要がある。そこには適度な抵抗感と挑戦してみたい…と思う課題であること。
- ④学習の終末には子どもたちにやり遂げた…という達成感・成就感があること。

この4点が、社会科の学習には必要ではないかと自分なりに意識して取り組むことにした。

その上でこの4点に自分が何をとり入れることができるかを楽しみとして実践に取り組むこととした。

2. 研究の実際

2. 1. 発展型・提案型の社会科学習

これは勝手に造った言葉なので一般的に合っているかどうかは分からないが、社会科の学習には大きく2つあるように思う。

一つは今まで自分が主にやってきた探求型の社会科学習だ。学習課題も「なぜ…?」「どうして…?」から始まり、一つのことを深くほりさげることによって目標に達する型だ。自分自身は社会科の授業というこの形での学習が多く、そこから先にどのように発展させようか…とは、あまり考えなかった。

もう一つは発展型…いや、提案型の社会科学習と言ってもいい。学習を探求するにとどまらず、さらに発展させる。その上に「このようにしてはどうか…」と一般社会に提案するのである。

「なぜ？」と探求した後に子どもたちがさらに発展させることなど考えも及ばなかった。しかし、社会科が問題解決学習である以上さらなる課題が生まれるのは当たり前のことだ。いや、課題が生まれなければ探求し切れていないと言われても仕方がない。探求のその先に発展があることは至極自然なことだったのだ。

発展することは分かった。しかし、次の提案型の社会科学習だ。3～6年生の小学生が「こうしてみ

てはどうですか？」と提案するのだ。あり得ない。だが、昨年一年間本校の4年生の社会科の実践を見させていただき、子どもたちには本気で自分たちが世の中を変えるんだという気概があることを知った。そこには奇をてらったものなど何一つない。それこそ本気で、しかも自分たちがやらねば誰がやるんだ…と言わんばかりである。

まずはこのことに衝撃を受けた。自分に提案型の授業をつくることができるだろうか。自分がやるとどうしても嘘っぽくなってしまいう気がする。これは今まで自分がそんなところまで足を踏み入れていなかったこともあるが、とにかく、一つは提案型の学習をする。子どもたちが本気になって社会に物申す学習こそ社会科学習なのではないかと考えることにした。そこに人としてよりよく生きようとする姿があるのかもしれないと考えた。

そこで、今年度は最終的に発展型…さらに提案型の学習展開ができるよう、「つむぐ」ことに主眼を置いてみた。

2. 2. 「ひと」を重視した学習活動

社会科学習では子どもと「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかかわらせることで学習活動を展開していくのだが、昨年度の実践でも「もの・こと」には子どもの目がいってもなかなか「ひと」にこだわろうとする子が出てこなかった。私自身も「ひと」を中心とした学習展開を考えることができず、人としての生き方を学習しているはずなのに「ひと」と関わることがこんなにも難しいとは思っていなかった。

そこで、今年度はもう一つ。「ひと」にこだわってみようと考えた。それは魅力ある人を探しあてるところから始めなければならなかったが、この「ひと」との出会いも様々な人がつむぐ中で生まれることとなる。そのことについては後述する。

3. 単元学習の実際

昨年度も触れたが、やはり子どもの生活から教材を探すことが難しい。5年生の社会科の学習が日本から世界へと広がっていることもいったい何が子どもの身近となるのか悩んだ。ただ附属小学校の5年生は南紀旅行と称して5月中旬に串本・那智勝浦を訪れるので自然と和歌山県の県魚にもなっているマグロに話がいった。子どもの生活からと言えば少し語弊はあるかもしれないが、南紀旅行も子どもの生活だとして、ここを契機に単元に入る。

3. 1. 水産業の学習について

3. 1. 2. 南紀旅行での？（ハテナ）

南紀旅行は、正に子どもたちが学習をつむいでいった。最初に那智勝浦漁港で見学したとき、運悪く5年A組の子たちだけ、クロマグロを見ることができなかった。他のクラスの子が見ることができたことも手伝って5Aの子たちは大変悔しがった。そこから串本大島漁港へ行き、養殖クロマグロのえさやり体験をし、実際に食べさせてもらいもした。Yさん自身も熱い思いをもった方で自分のつくっているクロマグロは最高や！と自負してやまない。実際に食べさせてもらったマグロの刺身はおいしい。子どもたちは養殖マグロに誇りをもつYさんに大いに引きつけられた。

ところが、次の串本水産試験場の方の話聞いたとき、「私は、天然のクロマグロの方がおいしいと思う。」という言葉聞いて子どもたちの頭の中に疑問が生まれた。

実際は天然のクロマグロと養殖のクロマグロはどちらがおいしいのだろうか。しかも自分たちは那智勝浦のクロマグロを見てもいない。そこで、子どもたちは和歌山市で那智勝浦産天然クロマグロを探すことにした。和歌山市はなんと言っても和歌山県の県庁所在地である。大方の子はすぐ見つかるかと高をくくっていた。ところが1週間、和歌山市のどこを回ってもクロマグロは見つからない。ほとんどが養殖の外国産マグロ。天然のクロマグロはあるにはあったが、長崎産といった具合だ。那智勝浦産どころか、天然クロマグロそのものが少ないことに気づき、子どもたちは全体学習で考える課題を「なぜ、勝浦産天然クロマグロは和歌山に無いんだ！！」とし、おのおのひとり学習に入った。

本時では様々な角度から意見が出されたが、天然クロマグロの絶対量が減ってきているという結論には行き着いたものの、では減っていることの明確な理由まではたどり着かなかった。

また、元々は「那智勝浦産のクロマグロを見たい。食べたい。養殖クロマグロと比べてみたい」という思いから始まった学習である。クロマグロは減っているから食べられないんだ。それだけ日本の水産業は困っている状態にある…ではすまなかった。

3. 1. 2. あきらめなかった子どもたち

やはり「食べる」という思いは絶大である。子どもたちはあきらめなかった。水産業の学習終了後もちよつとでも那智勝浦産の天然クロマグロの情報があるとひっかかった。子どもたちに協力した保護者の方もあきらめなかった。大阪にあるという情報を得てわざわざ見に行っ

くださった方もいた。親子ぐるみでクロマグロを追いかけた結果、那智勝浦町の仲買人に天然クロマグロを提供してくださる方がいるところまで、到達したのである。

人の思いはすごい。もちろんそれは子どもの思いであってもだ。いや、子どもだからこそ動かせるものがあることを教えられた。那智勝浦町で仲買人をしているW光太郎氏が那智勝浦町からわざわざ和歌山市の附属小学校にまで来てくれたことも手伝ったかもしれない。5Aの子たち全員が言った。

「Yさんには悪いけど、那智勝浦産天然クロマグロの方がおいしい。」

3. 1. 3. ? (ハテナ) がつながつた瞬間

Wさんは、子どもたちが到達し得なかった天然クロマグロの減少の原因についても教えてくれた。今天然クロマグロが減少しているのは巻き網漁法でごっそりとられてしまうためだと。特に長崎や鳥取の漁港では行政指導が入るほどだそうだ。巻き網量では大量に水揚げされる分、マグロに傷が多くすぐに冷凍されるため安価に市場に出る。

しかし、和歌山的那智勝浦産のマグロは延縄漁法で捕られるため、傷も少なく付加価値があるため高級物として東京の築地へすぐに回される。そのために和歌山には那智勝浦産の天然クロマグロがなかったのである。

また、このまま巻き網漁法が続くとクロマグロそのものが数年でいなくなる可能性があることを子どもたちは知った。そのとき、「だから、長崎産の天然クロマグロが和歌山市にあったんだ。なんでか分かった。」と言った子がいた。?がつながつた瞬間だった。

3. 1. 4. W Kという人物

W K氏は、YW水産の社長を務めており、第3のマグロと言われた生マグロの開発を行う等その活躍の場は今や世界へと羽ばたこうとしている。マグロ界だけでなく和歌山県の財界においても一目を置かれる人物だ。

このようにW氏は経歴も華々しいが、何かしら人を引きつけてやまないものがある。W社長の周りには人であふれ、慕う者・援助する方が多い。子どもたちもただ単に天然クロマグロを食べさせてくれたということ以上にW氏の人となりによってすぐに好きになってしまった。私自身もW氏の生き方に感銘を受け、何とか「W K」という人物にスポットを当てて授業をつくることできないかと思案するようになった。

そんなときに9月4日未明、台風12号が紀南地区、特に那智勝浦町を襲い、大変な被害を与え

るという災害が起きた。

3. 2. 情報産業の学習について

3. 2. 1. 地元独立U局

学習は、自分たちがどんなこと・ものから情報を得ているかから入った。様々なメディアがあるもの子どもたちの意見はテレビと新聞が大半を占めた。では、テレビと新聞ではどちらが情報として多く活用しているかと言う話になった。テレビは情報の速報性が高く、新聞はテレビより遅くはなるがその分確実な情報を伝達し、しかも手元に活字として残ることがいいと双方の利点を言い合った。その上でやはりテレビで情報入手することが多いと言うこととなった。そこで情報産業の学習はテレビを中心に行うこととなった。

しかし、みんなはどのチャンネル(テレビ局)を見ているのだろうかと言うことになり、自分なりによく見ているテレビ局を出し合ったが、圧倒的に多かったのは関西テレビ。続いてよみうりテレビ、以下省略して地元独立U局は2番目に見ないテレビ局であるという結論に至った。さらにJR和歌山駅前500人強のアンケートを実施した子たちがいたのだからそのアンケートの結果は500人中8人。さんざんな結果に「なぜ、地元独立U局は和歌山県にあるのだろうか?」「地元独立U局が和歌山県にある理由は?」という疑問が生まれたため、その課題に向かって地元独立U局の見学を2度行った。

その結果、地元独立U局は和歌山県の情報を担う他では仕入れることのできない貴重なテレビ局であることが判明した。また、上位ではないものの地元独立U局を見て和歌山県独自の情報を得ている人が多いことにも気がつき、地元独立U局を無くしてはならないことも分かった。

子どもたちの学習の流れは、地元独立U局で自分たちに何かできることはないかという意識に変わり始めていた。

3. 2. 2. Wさんをゲストにした番組の企画書を地元独立U局に提出しよう

地元独立U局に自分たちがやりたいことは何か。それについては大きく意見が2分された。一方は見る人が少ない地元独立U局を宣伝したいと言う意見。もう一方は地元独立U局の番組作りに参加したいという意見だ。子どもたちとしては、どちらかという地元独立U局の番組をつくるなど夢物語で最初から無理だとあきらめていた。

しかし2度の地元独立U局見学でテレビ業界にあこがれをもち、アナウンサーやテレビカメラマン・ディレクターといった職業にあこがれをもつ子たちの意見に押され、できるかどうかは分からないが、ともかくやってみよう。挑戦す

ることが大事で失敗してもいいじゃないか…ということとなった。

そのことを地元独立U局の報道局長に伝えるとともに企画書を出してくれということとなり、企画書作りに専念した。ただし、5分間という時間の制約もあった。

企画書をつくることでマスメディアとしての仕事の内容やマスメディアのもつ責任の重さがおおの分かってきた。また、見学时に地元独立U局が必ずゲストを登場させていたこともあり、その重要性を知った子どもたちは自分たちがお世話になった「W光太郎氏」をゲストに迎え、番組を作りをしよと考えた。

W氏をゲストに迎えたのはマグロの達人であること。台風12号の被災者であること。WWFという組織に加盟し、環境保護と世界に目を向けていることにあった。しかし、W社長を取り上げると放送したいことがたくさん出てくる。5分という時間では何ともなりそうにない。でも、どこも大事で削りたくはない。改めて子どもたちは、放送するという仕事の難しさを感じた。

3. 2. 3. 地元独立U局に企画が通り、元日特番として放送

案の定、テレビ局の方からは「これは30分の企画書だね。」と言われ、子どもたちは肩を落とす。それでも「内容はおもしろいので局に持ち帰って検討する」ということになり、喜んだ。自分たちでもいろいろと工夫はしてみたものの何分作り手としてテレビを考えていたものだから、なかなかうまくいかない。

そうこうしているうちに企画書を提出して3週間が経とうとしていた。私自身は企画そのものがうまく行かなかったのだろう…とあきらめ半分でしたが、やはり子どもたちはあきらめていなかった。

企画書の検討と同時進行で「もっと地元独立U局を見てください」というピラをJR和歌山駅や南海和歌山市駅を中心に1000枚近くばらまいたのである。この行動が地元独立U局の関係者を驚かせ、子どもたちの本気度を知った。

最初2分程度の番組でいいかと思われていたのが約束の5分になり、地元独立U局自身が創った企画書には7分に延びていた。さらに子どもたち30人をスタジオに入れるのはなかなか難しいと考えた地元独立U局は教室でのVTR撮りをするのを逆に子どもたちに提案。

子どもたちが決めたことは、自分たちがWさんを通して学んだことを授業形式で発表し合うこと。その授業にはWさんを招待すること。そうすれば、ゲストを呼んだことになるし、自分たち一人ひとりがこだわったことも語れるので

はないかと考えた。

VTRは地元独立U局の方が考えていた以上によく仕上がっていたようで、その日のうちに7分をさらに12分に拡大し、元日特番に使うことが決められた。

こうして、1月1日子どもたちは自分たちの冠コーナーをつくり上げた。

4. 単元学習の考察

単元そのものは子どもたち自身がつむいでいくことで最終的にW光太郎という人物について学習し、テレビ作りに関わるという最終目標を達成してしまった。

実は私は最初単元をつむいでいくことをあまり意識しておらず、単元が進むにつれ、子と子の考えや思いを個々ばらばらに挙げるのではなく、つむいでいくことが大事であることに気づかされた。

単元が展開することも個々ばらばらにあるのではなく、必ずつながりがある。そのことを子どもたちに教えられた気がする。単元を作り出すこともそうだが、単元計画を練ることにいつも困っていた私としてはつながりを大切にくんでいくことを知らされた。

結果的に「W K氏」の学習と情報産業との大きく2本の柱を立てて学習の流れを創ったことも私にとって初めての試みとなった。また、今回提案型の授業ができたかと言われれば「否」の面もあるが、これについてもますますの研究をしたいと考えている。

5. 成果と課題

やはり私は全員に授業参加させる意味でも全員発表にこだわっていることに気がついた。このあたりについても自分として、明確な意見を見いだせていないので何らかの答えをもてるよう再考したい。

今回の実践で、つむぐことの重要性に気づかされた。しかし、1時間の話し合いの授業の中で個々の意見をつむげたかというところではない。このあたりは来年度の私の課題となる。私が子どもたちに提示する課題は広い。もっともっと集約して、話し合いの方向性をもたせるものが必要だと考えた。

参考文献

- 2010 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 34
- 2011 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 35